

「靖国文集」再発見後のあらたな出会い

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像 (3)

松岡 勲

はじめに

今回は、靖国神社合祀取消訴訟高裁結審の直前の二〇一〇年六月に中学校三年生時（一九五八年）の靖国神社遺児参拝文集「靖国の父を訪ねて 第二二集」（財団法人大阪府遺族会発行）を再発見して以来、靖国神社と戦争をめぐる私の周辺で起こった人々とのあらたな出会いを書いてみます。

中島さんの奥さんの戦死されたお父さんのこと

靖国合祀取消訴訟の高裁判決（二〇一〇年二月二日）が出て以降、身近に反響がいくつもあり、大変ありがたく感じました。とりわけ嬉しかったのは、近所の画廊の店主の中島孝和さんに「テレビの報道見ました。また話を聞かせてください。」と声をかけられたことでした。二〇一一年の新年早々、中島さんとお話をすることができました。中島さんは私より六歳上の方で（今年七四歳）、子どもの頃からの知り合いです。僕の靖国訴訟にいたるまでの経過を書いた文章の「父を早く取り戻したい」合祀取消訴訟原告のひとりとして「涙なしには読めなかった。」とおっしゃってくださいました。

中島さんの奥さんの富美江さんのお父さんも一九四四年に戦死しておられ、「松岡さんと同じ境遇」と聞きました。奥さんがお茶を出してくださった時にその話になり、お母さんは叔父さん（戦死したお父さんの弟）と再婚されたので、戦死した父のことを聞く訳にかず、また、下に父のちがう妹と弟が生まれて、複雑な子ども時代と思春期を送ったとのことでした。父（実の父の弟）の死後もふたりの父の法事をしなければならず、弟妹との間も微妙なものがあつたとおっしゃっていました。中島さんとは近所とはいえ、少し我が家とは離れていたのと、私の家は農家でしたが、中島さん宅は商家であり、密接な関係でなかったことが、かえって靖国問題を客観的にお話しできる所以ではなかったかと思いました。

その後、中島さんとはお互いの近況を書いた文章のやりとりを時々していましたが、今年（二〇一二年）一月に中島さんとまたお目にかかり、いろいろと話ができました。驚いたことに富美江さんは今年の三月に六九歳でお亡くなりになっていました。富美江さんは一八年前に大腸癌の手術をされ、回復されてお元気だ

ったのですが、病が再発したとのことでした。また、富美江さんのお父さんは二度目の召集で、中国の湖南省で亡くられました。富美江さんがお父さんのことを他人に話されたのは、私が最初で最後だったとのこと、まさに「二期一会」だったと思います。

富美江さんのお父さんのお墓は茨木市の安威地区にあり、後日、中島さんのご案内でお参りをしました。お父さんの墓碑には、「故陸軍軍曹奥野三明之墓

戦死 行年二九才 昭和二八年三月建立」とありました。墓地のこの一角は安威地区で第二次世界大戦中に戦死した人たちの合同墓地で、各墓碑には同様に昭和二八年（一九五三年）建立とあり、二八基のお墓が並んでいました。中島さんは「家内が死に）私が死んだら、だれもお父さん（義父）の墓参りをする人はいないでしょうね。」とおっしゃいましたが、強くその言葉が心に残りました。（写真1）



写真1：お父さん（義父）の墓の前で語る中島さん

大学時代の先輩も靖国神社遺児参拝に参加していた

昨年（二〇一一年）九月末、その二年前に脳溢血で倒れ闘病中の先輩のSさんを見舞いに行きました。Sさんは左半身麻痺で、若いときに肺結核だった関係で結核菌が残っていたため気管支の切開手術をしました。そのため言葉が出にくく、また食事も流動食を胃に管で直接入れて栄養補給をしていました。また、車いすでの不自由な生活でした。

靖国訴訟高裁判決報道（朝日新聞）を奥さんが見られていて、Sさんにも見せていたので、そのことが話題になりました。そのなかで、奥さんが「主人も小学校五年生か中学校で靖国神社遺児参拝に行つたと以前に言っていました。」とおっしゃったので、「それは中学三年生です。Sさんとは学生時代、お互いの父の戦死の話はよくしたのですが、参拝の話はどちらからもしなかつたですね。」と私は話しました。学生時代にSさんの家を訪ねた時、制服姿で乗馬するお父さんの写真がかかっていたことを思い出します。

Sさんの家から帰って翌日、「もしかして文集にSさんの感想文が載っているかもしれないな。」と思い、調べたら、全文をコピーしていた「靖国の父を訪ねて 第五集」（大阪府遺族連盟、一九五五年三月発行）にSさんの文章がありました。読んで見て、驚きま

したが、あの聡明なSさん（私は大学時代の理知的で学究的なSさんを大変尊敬していました。）が私同様の「靖国の罫」にはめられていたのです。あらためてその恐ろしさを痛感しました。Sさんの靖国神社参拝の感想は次の通りです。

温い父のあの手 (S)

僕ははからずも大阪府遺児代表の中に加えられ、待望の靖国神社に参拝することができました。胸高なる希望と幼い頃の僕の思い出そして今は亡き父上、神と化したお父さんの前へ、大きく成長したこの身体を見せることが出来ました。

思えば十年前、戦争のため戦地に出征なされた父でした。出発するとき、僕の頭をあたたかい愛情のこもった手でそつとなでられて去っていかれました。

そのなつかしいお父さんと今靖国神社で会えたのです。「お父さん、皆元氣です。小さかった僕たち弟妹も、お母さんのおいしくしみの元にこんなに大きく成人いたしました。御安心下さい。これからもしっかりと勉強して、りつばな正しい人間となります。お父さん！」じつと眼をつぶっている、なつかしいお父さんの声が聞えてくるように思われました。「大きくなっただなあ、これからもしっかりとやるんだよ」と。僕は去り難い思いをして靖国神社を出た。（後略）

私より四歳上のSさんは五歳頃にお父さんと別れ、その「手のぬくもり」を覚えていたのです。今年の一二月に再度Sさん（七二歳）を訪ねました。お父さんは一九四五年八月二日にフィリピンで二七歳で亡くなられました。Sさんは病気で意思表示ができず、お母さんは二年前に亡くなられていたのです。戦死した島の名前等詳しいことは分かりませんが、Sさんが元気な時に「この戦死の日付はうそだ。」と言っていたそうです。帰って来た白木の箱には遺骨はなく、石だけだったとのことでした。（写真2）

写真2：「靖国の父を訪ねて第5集」最後部左端から5人目がSさん



第一班 天王寺・南・浪速・西淀川・生野・阿倍野区
住吉・東住吉区遺児代表

ところが、一二月に入ってから、Sさんの奥さんから電話が入りました。「今朝はSは痰がつまることもなく、調子が大変よかったです。お父さんの戦死の場所を聞きましたら、答えることができました。」とのうれしい連絡でした。Sさんは「スル群島シロマン山」と言ったとのことでした。インターネットで調べると、それは「スールー（スル）諸島」で、フィリピン諸島の南西部に位置し、ミンダナオ島からカリマンタン島にいたる群島でした。そこはフィリピンのイスラーム圏にあたりません。スールー諸島は、太平洋戦争末期の日本軍と連合軍の激戦地で、日本軍は全滅しました。そのスールー諸島のなかに「ホロ島」があり、島の東側に「シロマン山」があります。そこで日本軍の九六%が戦死しました。Sさんのお父さんはそこで亡くなられました。そのことをSさんは苦しい息をしながら教えてくれたのでした。彼には私が何を尋ねて来たのが分かっていたのです。お父さんの戦没地を言う時のSさんの口の動きを想像すると胸が熱くなりました。Sさんのお父さんの戦死された状況の詳しい報告は次回にします。

早死にした友人のお父さんはニューギニア戦線の生き残りだった

友人の家保達雄さん（六二歳）が今年五月に亡くなって、もう半年あまりがたちました。ほんとうに早いものです。家保さんのお見舞いに四月末に友人たちと病院に行った時、お姉さんから聞いた話が忘れられません。家保さんのお父さんは（パプア）ニューギニア戦線の生き残りで、大変悲惨な経験をされ、帰国されま

した。その辛さからお酒に溺れました。戦後、お父さんはお酒を飲むと「戦友が出撃し、亡くなった。」などとよく泣きながら話されたことです。私の父は中国の湖北省で戦死しています。私の原体験である父の戦死と靖国訴訟に関する文章の校正を校正の達人の家保さんにお願ひしたことがありました。その時、めつたに感想を言わない彼が「良い文章ですね。」と言ってくれました。お姉さんの話を聞いた時、彼とは六歳も離れているにも関わらず、僕の戦争体験と彼の戦後体験とがクロスしていたのだと気がつきました。家保さんのお父さんがニューギニア戦線でどのような体験をされたのか、その体験をどのように彼は聞き、また受け取って育ったのか、彼が生きているうちに聞いておけばよかったですとつくづく思いました。

今年の六月末に家保さんのお姉さんにその話をおうかがいするため、兵庫県の三田まで訪ねました。戦時中、お父さんはマラリアに罹患され帰国することになり、帰国途中に病院船が米軍に撃沈され、沢山の人が溺れ死んだのですが、お父さんは必死で泳いで救助され、九死に一生を得られました。戦後は、職場でよく上司と衝突され、職を転々とされたとのことでした。最後はお母さんが保健婦で生活を支えられたとのこと。そのお父さんを家保さんは「大変好きやったし、尊敬していた。」とお姉さんはおっしゃっていました。それを聞き、家保さんは、世の中の不合理に節を曲げないお父さんを尊敬していて、その生き方が彼の生き方でもあったのだと思いました。家保さんのお酒は人をなぐませ、楽しくさせるお酒でした。それは、「多分お父さんの悲しい酒、荒れた酒を見ていたから、そうなりたくなかったのでしょう。」

とお姉さんは言われました。しみじみと家保さんの生前の人柄を思い出した日でした。(写真3)

おわりに

このように靖国神社遺児参拝文集をめぐって一九五〇年代の状況を調べる中で、幾人もの方々の人生と私の人生が交差することを発見できました。最後にもうひとつ、私の娘に関わる話です。私の娘が、祖母の死後、「おばあちゃんがどのような生き方をしてきたのか知りたい。」と言いだしました。それで、今年の三月に祖母のことを詳しく知る従姉妹たちに集まってもらい、祖母の話の聞き取りを娘と一緒にしました。そのなかで、父の遺骨が帰ってきた時のことで、父の白木の箱には「石しか入っていないなかった。」と私の母から聞いたという話ができました。このことは母から聞いたことのない話で、あらたな発見でした。こうして戦死した父と母への私の思いを娘に伝えることができました。あらためて「記憶し続けること」の意味を思いをはせます。靖国訴訟のなかでつかんだ「一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像」というテーマを今後も追究していきます。

(二〇一二年・一一・七)



写真3：亡くなる3ヶ月前の宴席での家保さん